

# 岡山孤児院の里預制について

## －里預制に現代的意義を学ぶ－

長谷部 勝也

### はじめに

厚生労働省発表の「子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第8次報告の概要）及び児童虐待相談対応件数等」によれば、平成23年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数は59,862件であった。児童虐待の顕在化が進み、その相談件数も年々増加傾向にある。

このような動向のなか、子どもを親から分離して保護するケースへの対応が重要となってきた。また、増加する虐待件数に加え、児童が抱える心の問題と行動の問題が複雑になり、施設での集団養育システムでは、児童のニーズへの対応が難しくなってきたともいわれる。しかし、施設重視の施策を展開してきた日本においては、児童養護施設等が整備され、入所させ保護する方法が一般的に取られてきた。

一方、厚生労働省は、平成14年に「里親の認定等に関する省令」及び「里親が行う養育に関する最低基準」を制定し、里親制度の推進にも重点を置くようになった。

だが、平成14年の宇都宮里子傷害致死事件をはじめとした、里親による虐待の問題が発生し、それは、里親制度自身に欠陥や問題が生じているためだ、という指摘も存在する。

私は、その指摘の中でも特に「里親に対する地域的支援の希薄さ」という点に興味を持ち、調べを進める中で岡山孤児院の里預制での「地区世話役を中心とした里親ネットワーク形成」を知った。

ここでは、岡山孤児院の里預制について整理し、「岡山孤児院で行われていた里親による地域ネットワークの形成が現代の里親の地域支援を行う上で参考にできるのではないか」という仮説を立て、考察してみることにした。

## 1 里親制度の概要

### 1 里親制度の定義

里親制度に関する法的根拠は、児童福祉法に規定される「都道府県の採るべき措置」として「三 児童を小規模住居型児童養育事業を行う者若しくは里親に委託し、又は乳児院、児童養護施設、障害児入所施設、情緒障害児短期治療施設若しくは児童自立支援施設に入所させること。」（児童福祉法第27条第1項3号）である。

また、里親については、「里親とは、養育里親及び厚生労働省令で定める人数以下の要保護児童を養育することを希望する者であって、養子縁組によって養親となることを希望するものその他のこれに類する者として厚生労働省令で定めるもののうち、都道府県知事が第二十七条第一項第三号の規定により児童を委託する者として適当と認めるものをいう。」（児童福祉法第6条の4）と定義されている。

里親の認定等に関する省令では、里親は養育里親（養育里親、専門里親）、養子縁組によって養親となることを希望するものその他これに類する者として知事が適当と認めたもの（養子縁組によって養親となることを希望する者、親族里親）の4種類に分類されている。

## 2 里親制度の歴史

口碑によれば、里親の慣習は古くからあり、後一条天皇の時代に、四条大納言藤原公任卿の息女が、京都の洛北の地に預けられたとする貴族的風習に始まると言われている。

こうした貴族的風習とは別に、同性相応の者からもらう「養子制度」、遠方の子供をもらう「貰い子制度」、幼少から大屋に引き取られる「名子制度」等があった。

そこには、「小さいうちから育てて家族の一人にならないと鋤頭が務まらない」「船頭の養成には貰い子も欠くべからざる制度」という農村や漁村の実情があった。また、大原幽学の「育て子」制度や京都「五人組書」における棄てられた子の扱いなども里親に通じるものがある。

このような他所の子を育てる里親の風習が行われた理由としては、「母乳不足のため」「迷信から」「私生児の処置として」「労働者の手足まといになるため」「刑罰に伴って」などが考えられる。また、この時代の制度は、「他人に養育を委託する」「一定量の養育料が支払われる」「預ける期間が定められている」という特徴を持つ。

いずれにしても保護者側の理由によって一定期間を定めて、他人に子どもの養育を委託し、そのために養育料を里親に支払うという型の風習がいわゆる里親制度といわれた。

その視点を社会福祉（救済事業）の実践分野に移してみると、明治時代に入り、石井十次の岡山孤児院での里親委託があり、また、奈良県の生駒郡北倭村の集団里親などを探し出すことができる。

一方、東京都養育院の院外委託は、公立機関がひろく民間に養育者を求め、施設児を里子として養育を行っていた例がある。

松本武子（1972）『児童福祉の実証的研究』は、次のように紹介する。

「養育院が行った里親制度の端緒は明治18年2月頃の乳幼児院外委託である。当時の院外委託は『里子預け』であって、養子縁組の方法、いわゆる『里流れ制』であった。当時収容している児童（主に棄児）を養嗣子として貰い受けたいと希望するものが相当数あったのである。正式の院外委託は、明治27年7月、養育院院長渋沢栄一が幼童の院外委託に関する建議を行うことによって始められた。」（370-371）

日露戦争（明治37年～明治38年）後には、宗教家や篤志家の手によって、「集団養育よりも個人委託がよい」とされるが、一方で、里親による虐待があり、「里親取締規則」が作られた時代でもある。

大正13年には京都府社会課が洛北地域に「里子保護会」を結成するなどの動きもある。

昭和7年の救護法成立により、施設からの里子委託は禁止されたが、施設からの要望もあり、一部の地域では事実上の委託が行われていた。

農山村の疲弊時代であり、内職や農閑期の余暇を利用した生計の一助となっていたのであろうが、第2次大戦中にはこの制度は終息してしまうことになる。

第2次大戦後、戦災孤児や貧窮家庭が増加し、さらに児童収容施設の損壊により収容力は半減していた。この中で、昭和22年5月5日、戦後第1回の児童福祉週間が実地され、5月18日には第1回全国児童福祉大会が開催された。占領軍当局の努力もあり、里親制度が取り上げられ、翌年1月の児童福祉法とともに、まったく新しい制度として発足した。

児童の奴隷化を防ぐため、昭和24年6月には「同居児童届出制度」が追加された。

以降40年近く改正がなされず過ぎたが、昭和62年に厚生省次官通知「里親等家庭養育の運営について」及び厚生省児童家庭局長通知「里親等家庭運営要項の実地について」が通達された。そこでは、民間団体の活用、片親里親の認定、通所施設との二重措置の許可、5年ごとの里親の再確認などが定められた。

平成17年には児童福祉法が改正され、児童福祉法に里親が定義された。

### 3 里親制度の現状

里親委託ガイドラインによれば、里親委託は「①特定の大人との愛着関係の下で養育されることにより、安心感、自己肯定感、基本的信頼感を育むことができる ②家庭生活を体験し、将来、家庭生活を築く上でのモデルとすることができる ③家庭生活での人間関係を学び、地域社会での社会性を養い、生活技術を獲得できるなどが期待できる」とある。要保護児童政策として挙げられる里親制度だが、現在、うまく機能しているとは言い難い状況となっている。

三吉は、①日本の家族制度が持つ封鎖性 ②里親制度に対する誤解 ③制度的な環境要因 ④里親の専門性の4つの問題点を指摘する。

その指摘に従って私論を述べることにしたい。

#### ① 日本の家族制度が持つ封鎖性

我が国では「家族」と表される場合、血のつながった親子、兄弟姉妹を表すことが多い。血のつながりを前提としているため、それがない親子関係はうまくいかない、とする意識があったのではないかと考えられる。

#### ② 里親制度に対する誤解

里親制度は、要保護児童のための政策である。

しかし、里親制度と類似の制度に「養子縁組」がある。戦後の日本は、里親制度を「養子縁組のための試験期間」として理解されていた側面があり、たとえば、児童福祉法第6条の4には、「この法律で、里親とは … 要保護児童を養育することを希望する者であつて、養子縁組によって養親となることを希望するものその他のこれに類するものとし …」とある。つまり、里親の定義に養子縁組の希望者が含まれていることになる。

だが、養子縁組と里親制度は「一時的な保護養育制度」と「恒久的な身分制度」であり、その性格には差があるものである。養子縁組が児童にとって良い影響があることを否定することはできない。しかし、養子縁組を、つまり、「いずれ自分の子になること」を前提として里親制度を進めると、里親の方が里子に過剰な希望や期待を抱いてしまい、マッチングの際に上手くいかない事、自分の希望通りの子が現れると、児童福祉司などの訪問指導を忌避することなどが考えられる。

### ③ 制度的な環境要因

里親制度は法的な規定が少ない。特に里親子関係について、親権が実親から移されるという規定がないため、里親を解除し、児童を無理やりにでも引き取ろうとする親に対して、里親は無力となりやすい。また、具体的に児童の何を保証し、そのためにどのような義務があるのか、という規定が不十分であると考えられる。こうした規定をもとに、措置費の充実や訪問指導の方法などが考案されるべきではないだろうか。

### ④ 里親の専門性

養育や育児は児童のニーズや状態などに応じて適切に行われることが望ましい。問題を抱えた要保護児童の場合はなおさらであろう。

現在の里親制度は、ボランティアの善意にのみ頼っている状況にある。そこには、「ボランティア＝素人への委託」という意識がある。里親となることを希望する者のモチベーションを低下させ、そこで里親子間に問題が生じ、結果として委託解除になる、という流れが推定される。

松本（1977）は、今日の里親制度の現象衰退について、日本の伝統的な家族制度の遺制、専門の児童福祉司の確保、一般市民への広報活動の不足が要因と指摘し、さらに今後の発展課題として、地域の連帯、新しい制度の開拓、人材の育成の3点をあげている。

## 2 岡山孤児院の里預け制度の特徴（専門里親と地区世話役）

菊池（2007）は、岡山孤児院でおこなわれていた里預制度を、Ⅰ：里預制度という養護実践システムがどのように実地・展開されたか、Ⅱ：里親の質的变化、Ⅲ：個々の里親の養育実践の3点から調査している。岡山孤児院で行われた里預制の特長として、①長期養育を行い、成功例を持つ「専門里親」の存在、②専門里親から選出される、地区全体の里親をつなぐ「地区世話役」の存在、③里親の分布、の3つがあげられる。

以下、菊池の研究に学ぶことにする。

### 1 専門里親

長期的な養育経験や成功例を持つ里親を専門里親とし、専門里親に優先的に児童を預けていた。以下のいずれかに該当したものが「専門里親」と認識されていたと想定される。

- （ア）1人の里預児を乳幼児期から学齢期まで5年以上の養育経験を持ち、茶臼原孤児院への移転などの成功例を持つ里親
- （イ）2人以上の里預児の養育が合わせて乳幼児期から学齢期まで5年以上となり、うち1人以上茶臼原孤児院への移転などの成功例を持つ里親
- （ウ）2人以上の同年齢の里預児を別々に3年以上養育し、うち1人以上を茶臼原孤児院への移転など成功例を持つ里親
- （エ）1人の里預児を5年以上養育し、それに加えもう1人の里預児を1年以上養育し、うち1人以上を茶臼原孤児院へ移転するなどの成功例を持つ里親
- （オ）3人以上の里預児の養育期間が合わせて6年以上、うち1人を3年以上養育し、かつ茶臼原孤児院へ移転などの成功例を持つ里親

以上の条件には「3年」「5年」の期間が定められているものが多い。これは個々の里親の養育実践について、里親と里預児の「情合関係」の形成について着目し、「里預児と里親の数量的な『情合関係』は養育期間3年以上で『育まれ（育ち）』、5年以上で『深まる』」という分析がされている。

こうした情合関係の形成経験により、里親に専門性が生まれると考えられる。

## 2 地区世話役

専門里親の中から、特に経験豊富な者を地区世話役とし、その地域の里親と岡山事務所を、また、地域の里親同士をつなぐ存在としていた。

地区世話役は、里親と岡山事務所をつなぐ、ネットワークの結節点として存在していた。業務としては、里親家庭の巡回や預替（ある里親から別の里親へと引き渡すこと）の仲介、里親の発掘などを行っていた。

## 3 里親の分布

こうした児童の養育期間の長い里親はどのように出現したのか。

菊池によれば、里親が密集している地域で、かつ地区世話役の存在が確認できる地域では、里親ネットワークとも呼べるつながりが存在しているという。また、そのネットワークが存在している地域では、里親文化の継承と呼ぶべき現象が発生しやすいという。

里親文化の継承とは、1人の長期里親の知見が他の里親に伝承され、それがさらに次の新しい里親にも継承される状態である。

里親の密集している地域とはどのようなところか。岡山孤児院の児童を預ける地域的条件の大原則として、「人情淳樸にして地勢高燥水清くして衛生に適せる地方」というものがある。このような原則の下、里親が密集していた地域は、赤磐郡葛城村（実（延）人数14人）・御津郡馬屋下村（19人）・和気郡本庄村（11人）・上道郡高島村（5人）などである。これらの街に共通しているのは、「江戸時代から続く複数の自然村を1889年の市町村制に基づき合併した行政村である」ということである。

また、これらの行政村では、「村民の実際の日常生活に関する隣保相扶などの村落共同体的秩序は旧来の自然村単位で実地されていた」とある。こうした旧来の村落共同体的秩序・隣保相扶が里親制度にマッチングしたのではないかと考えられる。

## 3 岡山孤児院の実践から学ぶ里親制度の再考と試行

先に述べたように、里親制度は現状として様々な問題をはらんでいる。

それは、里親制度の歴史からくる偏見や、広報活動の少なさにより、養子縁組との混同・専門性の認識の薄さなどにつながっている。

岡山孤児院で行われていた里預制では、まず里親の専門性が認識されていた。特に、長期間の養育期間によって児童との情合関係を形成し、その児童を家庭復帰、または茶臼原孤児院での養育につなげた里親を専門性の高い里親と認識していた。こうした専門性の高い里親に、その地域の広報・及び相談役としての役割（地区世話役の役割）を担ってもらう制度が確立していた。

地区世話役の存在は、里親としてのあり方を次代の里親に語り、またその地域の里親同士のネットワークを形成する事に繋がっていた。こうしたネットワークの存在によって、里親が地域で孤立することを抑制し、児童が育つ地域的環境があったことが、この里預制の評価される点と考えられる。

現代の里親制度は里親のネットワーク形成は児童相談所や里親会などによって行われている。しかし、様々な業務を抱え、里親制度に集中的につくことができない児童相談所としての限界や、活動が低調な里親会が少なくないことなどが現状にある。

また、里親は「ボランティア」という認識が強く、専門性が認められている、とは考えにくい状況にある。

平成10年の「里親家庭における親と子の意識調査」では、委託児童の問題で困ったときの相談相手について、「夫婦で解決してしまう」という回答が里父42.3%、里母43.5%、「児童相談所」が里父26.9%、里母24.1%、「学校の先生」が里父15.4%、里母19.4%である。「他の里親むと回答したものは里父5.8%、里母1.6%であった。里親支援のネットワークが活用されていない、特に里親同士のネットワークが作られていないことがわかる。

また、相談相手に関して、児童福祉司が虐待対応に追われており、里親制度に専心できないのでは、とする意見も存在している。

平成20年の児童福祉法の一部改正により、里親支援機関支援事業の実地が開始された。

事業の内容としては①普及啓発活動、②各種里親研修、③里親委託支援、④里親家庭への家庭訪問、⑤里親による相互交流などが行われている。

しかし、実情としては年に2、3回程度の研修、年7回のレスパイトケア、一部の自治体で定期訪問が行われている、という状況である。

「岡山孤児院の里預制を参考に、現代の里親制度を再考する」という立場から考えれば、現代には「里親を専門的な役割として見る視点」及び「専門性の高い里親を中心につくる里親ネットワークの形成」が不足している、と考えられるだろう。

しかしながら、岡山孤児院を参考に里親制度を再考するには、いくつかの課題がある。ひとつは、「家族制度の比較」である。岡山孤児院の里預制がうまくネットワーク形成につながった地域は、「隣保相扶などの村落共同体的秩序」が存在していた自然村からなる行政村である。いわば地域間のネットワークが形成されやすい状況にあったのではないだろうか。現代の、個人主義が強い家族制度の中で、同じような発展を遂げることは難しいのではないだろうか。

また、里親の専門性をどのような基準で判断するか、という点も問題としてあげられる。岡山孤児院では児童養育の期間と帰宅や茶臼原孤児院への移転を成功例としていた。

現代では何を基準とすべきだろうか。

海外では、第一回白亜館会議でのルーズベルト大統領の発言など、施設の限界と里親の必要性が語られている。児童のニーズに合う、施設と里親の両立が求められてきている。里親制度に関しては、里親を普及する事と支援する体制の2つが求められてきている。

岡山孤児院の事例はその一つの例示となるだろう。

おわりに

里親制度を調べるにあたり、私は「里親」とは何か、という点に疑問を持っていた。

実親の代理であるならば「代理親」と呼ばれることの方が多いのではないかと考えていた。里親のことを英語では「foster parent」と言う。「foster」の語には「養育する、世話をする」といった意味がある。なぜ、「里親」という日本語を当てたのだろうか。

このことに関して、「里親は『里』の『親』である」事の意味を考え、考察を進めた。

三吉明編（1963）『里親制度の研究』には、次のような記述がある。

里子の「里」はいわゆる古唐制において百戸をもって里とし、またわが国における大化改新の際、五〇戸を里とした行政区制によるものであることは容易に想像される。特に「里子」は既に聖徳太子の時代にみられるといわれているが、また万葉集の山上憶良の「貧窮問答」にみられ源氏物語にもみられる。宮中に仕える妥子（みこ）の生家も里といわれた。わが国では家はすべて宮中の真似であったから、一家の主人を宮中の者にたとえるなら、妻の生家は里となり、一家の主人を宮中の者のように、妻は崇め仕えなければならぬという考えであった。やがて里は、「人の住む地」あるいは「奉公人達の実家」を意味し、今日においても「里帰り」などと用いられている。

すなわちこのようにして里子とは、村里へ預けられた子を意味し、やがて他人に預けて養育を委託した子を広く里子とよぶようになった。

百戸という広さを「里」としていたこと、村里へ預けられる子を「里子」と呼んでいたこと。このことから考える「里親」は、一人の親なのではなく、子どもを取り巻く環境の全てなのではないだろうか。子どもが安心して成長できる環境を整え、問題を抱えてしまった子どもを迎え入れ、そこで育てることが「里親になる」ことではないだろうか。

岡山孤児院で行われた里預制は、3つの特徴を持っていた。①長期養育や成功経験を持つ専門里親の存在 ②自分の住む地域を担当とし、地域内の里親を支える地区世話役 ③旧来の隣保相扶からなる人のつながりの活用、の3つである。

菊池らの先行研究からこの特徴を理解したときに、私には、これが本当の意味での「里親」ではないのか、と感じた。ただそこに養育をしてくれる代わりの人がいるだけでなく、養育を支える人のつながりがあり、そのつながりが「里」全体に育っていること、これが「里親」という環境ではないか、と感じたのである。

現代の里親制度の問題点の一つに、「地域的な支援の希薄さ」というものがある。他にも多くの点で問題点が指摘され、里親養育よりも施設養育の方が行政的に選ばれやすい、という現状もある。

要保護児童などの問題を抱える児童のための施設で実習を行なう機会があった。

施設にも「児童の個別的なケアに目が行き届きにくい」ということがあることを学んでいたが、実際そのような場面にも遭遇した。しかし、施設のことをよく知り、理解する町の人々、ボランティアの方々の支援の輪にある場面では、目が行き届きにくい箇所にもその方々のまなざしと見守りがあった。実習では、このことが深く印象に残っている。

最後に、施設と里親は、要保護児童の対策の二本の柱として考えられている。それぞれに専門性や限界があり、どちらが優れているというものではない。また、どちらも施設の

み・里親のみでは立ち行かず、「児童を支える環境」として多くの人々と多くの社会資源の活用が不可欠である。

生活の場としての地域には、児童を支える環境としての「里」があり、そこで生活する「親」がいる。これが、「『里』の『親』である」ということではないだろうか。

これが私なりの「里親」とは何か、という疑問の答えであり、今回の考察で私が考え、学んだことである。

#### 文献

- 1 菊池義昭「大正期の岡山孤児院の里預制の統計的実態」『東北社会福祉史研究 (25)』1-15, 2007-03-24 東北社会福祉史研究連絡会
- 2 菊池義昭「1912年前後の岡山孤児院の里預制の具体的実践の解明」『東北社会福祉史研究 (27)』3-26, 2009-03-29 東北社会福祉史研究連絡会
- 3 菊池義昭「1914年から1916年の岡山孤児院の里親の地域分布と専門化の動向」『ライフデザイン学研究 5』75-108
- 4 菊池義昭「岡山孤児院の1979年から1919年の里預終了児の個別事例の内容と特徴」『ライフデザイン学研究 6』85-128
- 5 菊池義昭「1917年から1926年の岡山孤児院の里預制の終息までの内容 ―その動向と里預児110事例の数量的な内容を中心に―」『東北社会福祉史研究 (28)』1-26, 2010-03-28 東北社会福祉史研究連絡会
- 6 庄司 順一「里親制度の現状と課題―里親制度を発展させるために（特集 子ども家庭福祉における里親制度の現状と課題）」『子どもの虐待とネグレクト 9(2)』162-170, 2007-08 日本子ども虐待防止学会
- 7 鈴木幸雄「日本の里親制度に関する基礎的考察」1997/12 『北海道社会福祉研究第18号』（北海道社会福祉学会発行）
- 8 鈴木幸雄『里親家庭における親と子の意識調査』 鈴木幸雄ほか 1999/03 北海道里親会連合会
- 9 津崎哲雄「わが国における里親制度の基本問題～宇都宮里子傷害致死事件に学ぶ～」『福祉社会研究 4・5』1-19, 2005-02 京都府立大学
- 10 畠中宗一「わが国における里親制度の現状と課題」『中国短期大学紀要 20』99-109, 1989-06-16
- 11 三吉明ほか『里親制度の研究』財団法人 1963, 33-34, 日本児童福祉協会
- 12 松本武子『児童福祉の実証的研究』1972, 370-371, 誠信書房
- 13 松本武子編著『里親制度』1977, 10-17, 相川書房